

しいのき



鑑と鏡と鑿と

名誉館長 三 隅 治 雄

鑑も、鏡も、共にカガミとよみます。鑑は古代中国でもちいた水カガミで、水を満たした盥型の器をさします。鏡は青銅製で、裏にさまざまの文様を彫んだものを言います。訓をカガミとしたのは、一説にわが身を映して自己をカンガエミルの意からと申します。倫理の模範を鑑と言い、歴史を先例として現在を省みる意から、歴史書に「大鏡」「吾妻鑑」などの名を与えたのは、その意の流れです。が、また語源をカゲミ（影見）とする説も有力です。おぼろに映る人やものの姿を靈魂の影と見、それらの靈魂をやどし、靈界のすがたを示現させる鑑・鏡を神秘的呪具と観じたのです。弥生時代前期末ごろからわが国に伝来した青銅鏡が、祭具として用いられたのもその信仰で、古墳時代にも墓の副葬品として埋納され、神の依代にもなりました。表紙の鏡も墓の埋納品で、区内の御嶽遺跡調査で発掘された15・6世紀ごろのものですが、墓の主が馬であるのが稀有のことです。ただ馬具の轡に付ける金具を鑿とよぶ点は縁がありますね。

文化財よもやま話

観音講

中野区の鷺宮では毎月、あるいは年に数回と日を決めて観音講を行っている地域があります。

観音信仰は『法華経』の伝来とともに日本に伝えられました。観世音菩薩は33身に変化して衆生を救う、といわれる慈悲の仏とされており、人々の日々幸せに生きることを願う心持ちによって信仰されていました。仏教と深い関わりをもつ観音信仰が、広まり、そして各地域で根付いていくなかで、村々によっては観音講という信仰上の集団がつくられていったと考えられます。

所によっては子授け、安産を祈願する主婦たちによって構成されている子安講と同じ集まりを、観音講と称するところもありますが、鷺宮での観音講は主に男性によって行われています。

現在の白鷺のうち、かつては宮前と呼ばれた地域に今でも観音講が続けられていました。毎月17日、夜7時ころから夜半にかけて、地元旧家の人々が集まり、『観音経』『般若心経』をあげ、宴会を行います。観音講は毎月異なった家で行われ、この会場を務める家を宿といいます。本尊の掛け軸を始め、道具類は木箱にきちんと納められ、家々の間を持ち回りされるのです。かつて女性による念仏講と男性による観音講と二つあったものが、一つになったのだということで、現在宿をつとめる家は11軒、当日は約5人前後集まるそうです。講は信仰という面でも重要ですが、地域社会で生きる上で、家々の結束を深めるということの一つの場でもありました。ここで目下の話題が語られ、昔は講中を抜けると、村づきあいを外されたといいます。

更に鷺宮の早船氏でも観音講が行われています。これは「早船観音講」と呼ばれ、白鷺のものとは異なる点は、講中が全員早船イッけで構成されていることです。講は年に四回、18日に行われ、現在参加している15軒の家々が宿を務めます。また2月6日には「おひまち」があります。これは毎年必ず講元の家で行われることになっています。講の折には祭壇が設けられますが、ここで燃やされるロウソクには安産の守りになるという言い伝えがあります。小さくなったロウソクは、お産間近の女性に渡されます。

大地に眠る歴史

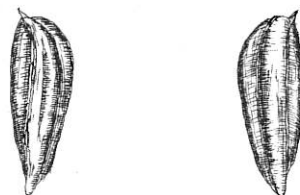
旧石器時代の稲

稲作が行われ始めたのは、弥生時代ですが、稲自体はそれよりはるか昔から日本に生えていたという、耳を疑う人もいるかと思えます。

しかし、旧石器時代、今から約1万2千年前にはすでに稲があったのです。

昭和29年、区内江古田三丁目1番の都営住宅建設地で地質調査が行われました。その頃、松が丘に住んでいた故直良信夫博士（早稲田大学教授で明石原人の発見者で有名）が、ちょうど、そこに通りがかり、掘り返された土の塊を詳細に調べたところ、地上から約3mの深さにあった粘土層の中から二粒の稲の化石が発見されたのです。

博士は早速、研究を進め、この稲が長粒系のもので、現在のタイ米と同種であることをつきとめました。さらに、同じ土層から出土した針葉樹の化石などから、洪積世末期の時代であることも判明しました。洪積世末期は人類の歴史区分でいいますと旧石器時代末期に相当しています。



(約4倍)

この頃の日本にはナウマン象が多く生息していたことが知られ、これらの稲は彼等の餌になっていたのではないかと博士は推測しています。当時の人類もあるいは米を食べていたのかもしれませんが。この発見は海外でも有名になり、この稲の化石を一目見るため多くの研究者が訪れたそうです。

この化石はその後、博士によって国立科学博物館に納められました。

中野区の戦前の農村風景の写真が不足しています。

おゆずりできる方はご一報を。

新規指定文化財紹介

平成5・6年度にわたって、中野区内の51寺院に所蔵されている仏像、絵画、工芸品など合計291点の仏教美術の調査をおこないました。そのなかには、作風から平安時代(西暦11~12世紀頃)に畿内地方でつくられたと考えられる千手観音像をはじめ、鎌倉時代(13世紀頃)の釈迦如来像など美術的に、また文化財としても、たいへんに優れた作品の存在が明らかにされました。中野区文化財保護審議会は、文化財としてとくに価値が高いと認められる11点を検討のうえ選定し、教育委員会において、下記のとうり決定しました。

絵画

	件名	所蔵	時代
1	弘法大師像	密蔵院(沼袋二丁目)	室町時代
2	川庵宗鼎像	成願寺(本町二丁目)	室町時代
3	親鸞聖人像	源通寺(上高田一丁目)	江戸時代
4	聖徳太子像	源通寺(")	江戸時代
5	浄土七祖像	源通寺(")	江戸時代



1. 弘法大師像 密蔵院



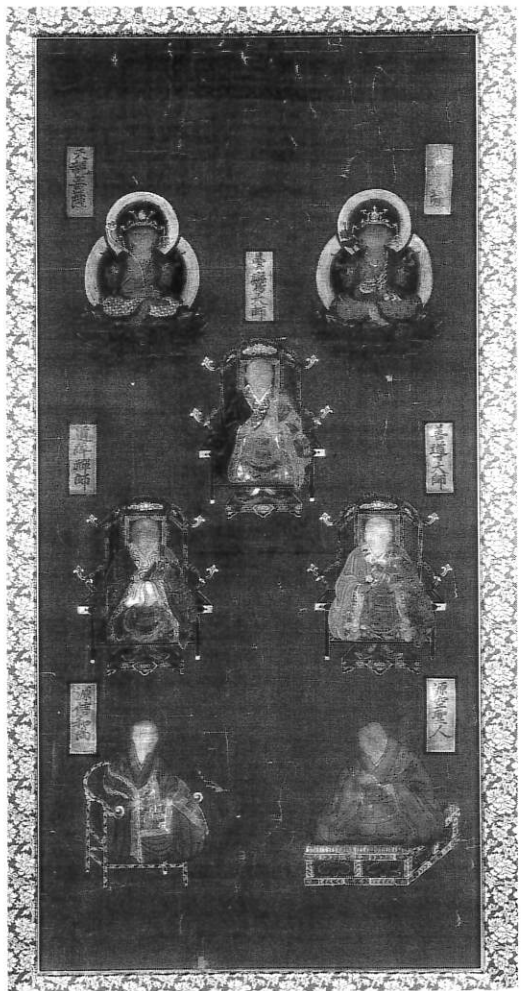
2. 川庵宗鼎像 成願寺



3. 親鸞聖人像 源通寺



4. 聖徳太子像 源通寺



5. 浄土七祖像 源通寺

仏 像

	件 名	所 蔵	時 代
1	阿弥陀如来立像	貞源寺(沼袋二丁目)	平安時代
2	釈迦如来坐像	成願寺(本町二丁目)	鎌倉時代
3	千手観音立像	光徳院(上高田五丁目)	南北朝時代
4	十一面観音立像	福蔵院(白鷺一丁目)	室町時代
5	難陀竜王立像	福蔵院(")	室町時代
6	雨宝童子立像	福蔵院(")	室町時代



2. 釈迦如来坐像 成願寺



1. 阿弥陀如来立像 貞源寺



3. 千手観音立像 光徳院



4. 十一面観音立像
福蔵院



5. 難陀竜王立像
福蔵院



6. 雨宝童子立像 福蔵院

山荘の碑をめぐる人々

新井白石と〈親指の聖母〉

「宝永年中にローマのバテレン、ヨアンとその信徒の長助夫妻もまたここに長期間収容され、ここで没している。(中略)朝妻という遊女がこの獄舎にとらわれ、処刑されるときに、牢獄のそばの桜の木を指して、この桜の花の咲くのを見ずに死ぬのは残念ですといったので、役人はこれを憐れみ、花の咲くのを待って処刑した。それ以後、その桜の樹を「朝妻桜」と呼ぶようになった。」

これは、中野区大和町四丁目にある蓮華寺の本堂の前に立っている「山荘の碑」の一節を現代語になおしたものです。この碑は、江戸時代の文化年間(1804~1817)に立てられ、現在の文京区小石川小日向一丁目にあった蓮華寺の移転にともなって現在地に移ってきたものです。この文中にあるヨアンとは紛れもなく、宝永5年、キリシタン禁制下の日本に潜入したシドッチェ(Johannes Baptista Sidotti)にほかなりません。シドッチェについては「しいのき」第24号をごらんください。

將軍徳川家宣の特命を受けた新井白石がシドッチェの尋問のとき、白石自身によって書き記された「長崎注進羅馬人事」(ながさきちゅうしんろまじんのこと)の中にシドッチェの所持品の数々のスケッチとその説明があります。とりわけ興味深いものは第1図。白石の筆で「サンタマリアと申す宗門の本尊の由、私も奉行所においてこれを見ました。この女の姿は年の頃四十近くに見え、伏し目、鼻筋が通って美しい顔立ち、頭に被った衣の色は青藍色」と記されています。この絵は現在、東京国立博物館に収蔵されているカルロ・ドルチ(Carlo Dolci. 1616~1686)作の「親指の聖母(Madonna del ditto)」(第2図)であり、シドッチェが日本に潜入したとき所持していたものと考えられます。作風から見てドルチ晩年の1680年代の作と見られること、シドッチェの潜入が宝永5年(1708)であること、白石みずから実現し、記述したサンタマリアの構図と一致することから確かめられます。

江戸小石川の地下牢の中で殉教の死を遂げたシドッチェは、中野区の蓮華寺にその名をとどめ、国立博物館に「親指の聖母」を残しているのです。



▲第一図



▲第二図

〈朝妻という遊女〉

蓮華寺の「山荘の碑」にある遊女朝妻とはいったいどのような人なのでしょう。朝妻について多くの人々が微に入り細にわたって調査と研究を重ねてきましたが、皆目見当がついていません。彼女がキリシタンであるという罪でキリシタン屋敷に投獄されたものか、それとも他の罪状でとりあえずここに収容されたものか、不明なのです。

文政3年(1820)の頃、十方庵という人が著した「遊歴雑記」という本のなかに「小石川の蓮華寺(現在、中野区大和町4丁目)を訪問し、この寺の中に朝妻という白拍子の墓があると聞き及んでいたもので、探してみようと同伴の三人で手分けして探してみたが、ついに発見することができなかった」と記されています。結局、「山荘の碑」だけが彼女を物語る唯一つの歴史資料なのでしょう。

さて「近世見聞録」という本があります。その宝永元年(1751)の出来事を書き記した中に「新吉原の伏見町にある置屋、桐屋梅の遊女浅つまが、仲間の遊女こずえを六月十四日の夜、かみそりで喉をかき切り即死させた。まず浅つまを、続いて同僚六人を取り調べ、八月二十七日判決が下った」とあります。宝永元年といえば丁度シドッチェがキリシタン屋敷に投獄される4年前に当たります。仮に、この記事にある浅つまが「山荘の碑」にある朝妻のことならば、この三つの記録が朝妻についてのすべであるといえます。

岡本綺堂の傑作「切支丹屋敷」に描かれた朝妻は、彼の想像力を羽ばたかせた情緒にあふれた文学的虚構といえるでしょう。

事業報告

各種事業経過

1996年1月～3月

事業名	内 容	期 間
企 画 展	「お正月一はがきのたのしみ」展	12/14～1/13
企 画 展	第7回「おひなさま展」	2/6～3/20
講 演 会	「竹姫さまの雛道具」講師 藤田順子氏（人形研究家）	3/9
体 験 学 習	「拓本講座」講師 館学芸員	3/15～3/16
文化財調査	鷺宮地区民俗調査	継続中
埋蔵文化財調査	御嶽遺跡 調査報告書刊行 御嶽遺跡 第二次発掘調査 中野三丁目民有地立会調査	継続中 1/14

寄贈資料一覧

1995年4月20日～6月30日
敬称略受入順

資料名	点数	氏 名
五月人形	一式	江古田保育園
大正8年の雛人形	一式	藤森 悦
ガスコンロ	1	藤本 夏子
三方	1	岸 銀太郎
行灯・ざる・草鞋	3	中村 充雄
アポロン・シザース	1	平井 斉
はいのう	1	荒井 澄子
教科書	52	志水 数重
電算機	1	真木 和夫
雛人形・鯉幟	2	佐久間 寛
映画チラシ・水彩画	11	矢島 典雄
三味線ほか	70	小西 豊子
戦中の子供服	50	高木 裕
大工道具ほか	29	奥山 清
石炭バケツ	1	福 歳 院
お櫃	1	大久保哲三
半襟	2	菅谷 美子
従軍記章ほか	一式	鈴木鋭三郎
映写機・テープ	2	武山 正雄
ペーゴマ	32	大居 忠
木製玩具	6	池田佳代子
メンコ	15	福島 弘徳
木馬	1	小宮 茂
人形・羽子板ほか	7	三浦紀美子
掛軸ほか	4	北村 孝子

◎貴重な資料をありがとうございました。厚くお礼申し上げます。

NEWS

「中野区の仏教美術」
「御嶽遺跡第1次発掘調査報告書」が刊行されました。区内の仏像調査・戦国時代の遺跡の報告書です。



▲おひなさま展（見学する子供達）

入館状況

1996年12月～2月（延68日間） (人)

一 般	社教団体	学校教育	合 計
8,814	219	1,677	10,710

発行年月日 1996年4月1日

山崎記念
編集・発行  中野区立歴史民俗資料館

〒165 東京都中野区江古田4-3-4

☎ 03(3319)9221 FAX 03(3319)9119

(印刷物登録番号 7中教社第18号)